

明治初年の博覧会と地域社会

塩原佳典

筑摩県下博覧会にみる「開化」の諸相

Expositions and Local Communities in the Early Meiji Era: Aspects of “Civilization” at the Exposition in Chikuma Prefecture
SHIOHARA Yoshinori

はじめに

- ① 筑摩県下博覧会の概観
 - ② 「開化」を通じた卓越化／序列化
 - ③ 「開化」から勧業へ
- おわりに

【論文要旨】

一九世紀後半は、「博覧会時代」ともいわれる。ヨーロッパで始まった万国博覧会を契機として、博覧会ブームが世界に広がっていく。その波を受け、明治維新後の日本でも各地で博覧会が催されていた。

本稿では、明治初年における地方博覧会の諸相について、筑摩県（現在の長野県中南部および岐阜県北東部）の事例から検討を加えた。筑摩県の特徴は、中心地である松本だけでなく、県下各地で博覧会が催されていた点にある。その数は、わずか五年に満たない存続期間で、現在確認できるだけで全二七回に及ぶ。

筑摩県では、県下各地で博覧会が盛んに催されていた。その背景について、担い手となった博覧会社の動向や会の趣旨文を手がかりに検討した。第一に、博覧会の運営に携わること、その担い手たちに卓越した立場をもたらしたと考えられる。担い手たちは、文部省博覧会事務局などとの交渉により地域の外から知・情報を取り次いだり、展示するに相応しいモノやコトを選別したりすることを通じ、「開化」の主導権

を獲得していった。第二に筑摩県下各地の趣意書では、地元の名所・旧跡と関連づけて開催経緯が語られていた。博覧会は、地域意識を喚起する契機となっていた。また松本など先行する地域を模倣しようとする意識も、繰り返し表明されていた。「開化」の趨勢に乗り遅れまいと、各地で競い合うように博覧会が開かれていく様子が窺えた。

明治初年の博覧会は、「開化」を象徴する事業として、地域社会における諸関係の再編成を促していた。しかし地方博覧会で模索されていた「開化」は、明治新政府が意図とした勧業の趣旨と重なるものでは必ずしもなかった。筑摩県下博覧会では、「品評」や「農議所」といった試みがみられたものの、それらは実効性をともなうには至らなかった。博覧会の趣旨が「開化」から勧業へと本格的に移行するのは、内国勧業博覧会が始まる明治一〇年代に入ってからと見通される。

【キーワード】 文明開化、博覧会、筑摩県、地域意識、勧業